

---

# ネットゲーム、始めました

部屋内妄想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネットゲーム、始めました

### 【Nコード】

N2812X

### 【作者名】

部屋内妄想

### 【あらすじ】

ゲーム経験のない高校生新堂かなめは、同級生の少女早崎伊織に誘われオンラインゲームを始めることに  
オンラインゲームの世界を舞台に繰り広げられるほのぼののコメディー

## 第一話・『ネットゲーム、初めて聞きました』

「あちっ！」

右手の親指に熱いお湯がかかり、思わず手を離しそうになったが、そうするとカッププラーメンの中身がアスファルトにブチマケることになるので俺は我慢した。

特売で買った九十八円のカップめんとはいえ、一口も食べずにこぼすのは勿体ないし罰が当たる。神様に、それと ちゃんにもだ。

ところで先程から道行く方々がすれ違いざまに俺の右手に注目しているのは何故だろう。カップめんを持ちながら歩く人がそんなに珍しいか。

いや、単にこれから向かうところが徒歩三分くらいで丁度家を出る時に小腹が空いたから、ならばとお湯を入れて持って出ただけだから。時間の有効活用だから。

そう道行く主婦に丁寧に説明したい気持ち堪えながら、視線を合わせないように左手に持ったプリントを意味もなく見る。

内容はなんてこともなく、迫る中間テスト範囲が書かれただけのものだ。俺も貰って今はくしゃくしゃになってゴミ袋の中でおしくらまんじゅう状態だ。明日の朝は燃えるゴミの日だしな。

そうだ。今、俺が持つプリントは俺のではない。本来帰りのホームルームに教室に居れば受け取れたはずのそれを、俺はわざわざ病欠した生徒に届けに向かっている最中だ。

友人でもなく、会話を交わしたことすらなのに、どうして俺が届け役を任されたのかというと家が近いという、たったそれだけの単純明快な理由だ。友人が携帯メールで送ればいいものかとも思うが、そいつは友人もおらず携帯も持ってないようで、困った末に俺に頼んだというわけだ。

人付き合いが不得手な俺でさえ一人、今の高校にいるのに、一人もいないとは……確かにそいつが誰かと会話してるところを見たこ

とはないし、むしろ拒絶しているようにも見える。誰かが話しかけても素っ気ない反応をしているし、まるで影のような存在感で教師に指されところも見たことはない。

クラスでは浮いた存在。

それが俺の早崎伊織の印象だった。

「……くずれ荘。相変わらずベストネーミングだな」

アパート名が彫られた長年の月日の経過を物語るくすんだ木の板を眺め、俺は呆れ半分に感心して呟いた。

名は体を表すの見本にしたいその建物は、確かに台風一過とともに無くなっていてもおかしくなくくらいにボロい。

築五十年は経ってるらしいからそうなっているも別段変ではないのだが、このアパート名を考えた家主は何を思っ命名したのだろうか。

俺の今し方の呟きを引き出すために名付けたのだとしたら、かなりの長期計画だったなと素直に感心せざるを得ない。

あまり眺めているとカップめんが伸びてしまっし、さっさと用件を済ませよう。

担任の話では早崎の部屋は二〇四号室だったなと、鉄製の錆びた階段をカンカンと響かせて上がる。

事情は知らないが早崎は一人暮らしをしていると聞いた。こんなボロアパートの一室では、様々な憶測が脳内で巡っしてしまい、俺は目頭が熱くなる。

噂では頻繁に休むため病弱な令嬢説も流れたが、さすがにお嬢様はこんなところには住まない。日夜バイトで働き詰めた結果体を壊した。という理由の方が納得できる。

そんな悲壮感溢れるストーリーを脳内で創りながら部屋の前に着いた。ネームプレートにも『早崎』とある。

新聞受けに放り込んでいくことも考えたが、病欠ということ様も見てくるよう担任に頼まれたことを思いだしノックをする。担

任（二十八歳・女・独身）に思春期の生徒を一人暮らしの異性の家に送り込むというのは危険だと忠告してみたが『新堂なら大丈夫だろ』と面白い冗談を訊いたように笑いながら返された。

「……………あ」

返事はなく、カップめんの状態を気に掛けると俺はとんでもない過ちに気付いた。

箸がねえ。

箸がないと熱くて食べれないじゃないか。カップ焼きそばならなんとか手掴みでいけるが、熱々のスープに手を突っ込むのは自殺行為だ。俺はバカだ。壁に頭を打ち付けたくなるが痛いからやめた。

今すぐ走って返っても、一分半くらい掛かるし、全力疾走するとお湯が暴れて火傷する確率が高い。

ここは、プリントを渡すついでに割り箸でも借りるのがカップめんに対しても最良の判断だ。こいつだって一番美味い時に食べてほしいに決まってる。だろ？

もう一度、強くノックをする。

しかし、返事はなかった。

事態は急を争う。俺は試しにノブを握ると簡単に回った。鍵は掛かってないようだ。不用心だが幸運だ。悪いと思いつつも俺はドアを開いた。

外観からの想像通り部屋はパツと見て六畳一間の手狭な部屋だった。玄関から左を向くと台所があり、汚れた食器が無惨にシンクを埋めていた。食器の泣き声が聞こえてきそうなくらいの酷い有様だ。

部屋の奥に視線をやると更に酷い。

角に置かれたゴミ箱は許容量をオーバーしており、そこから溢れたゴミくずが周りに散らばり、足の踏み場もないくらいに衣服やら雑多な物が数多く床に散乱している。

俺は口端をひくかせ、今にも部屋に上がり込みたい衝動に駆られる。

汚いを超越した部屋を見渡していると、早崎の特徴である長い黒

髪が畳に墨汁をこぼしたように広がっているのが見えた。姿は玄關を仕切る引き戸に隠れているが、居留守かよと俺は苛つきながらも、

「早崎さん」

そう呼びかけると黒髪がスルスルと戸の向こうに消えていき、少ししてゆつたりした足取りで早崎が姿を見せた。

「……誰？」

早崎は顔を歪ませ気怠そうに聞いてきた。

ボサボサの長い髪は自室だからというわけではなくいつもそんな感じだ。身だしなみに無頓着なのを表すように今の格好は、恐らくは中学時代であるう紫のジャージ上下だ。うちの指定は赤だからな別に同級生のオシャレとはかけ離れたジャージ姿を見ても幻滅はしない。俺の妹なんざ休日以外は寝る時を除いてほとんどジャージだ。

しかし、早崎も身だしなみを気にかければいいのにと、余計なお世話かも知れないがいつも思う。顔立ちは整っているのだし人気が出るだろう。告白だってあるかもしれない。

けれども、俺はその一人に加わろうとは思わない。容姿だけで俺は人を好きにはならないし、今言ったことからしても印象は悪くなつたばかりだ。

「隣の席の奴を忘れんなよ」

名前はともかく全くの他人のように「誰？」と聞かれるとは予想外だった。

早崎はゆつくりと首を傾げてから、思いだそうと仮想の教室を浮かべたのか右を向いた。

「いや、そっちは窓だろ」

早崎の席は窓際最後尾だ。隣の席は俺しかいない。

言われて早崎は左を向き、そして前を向き、

「あー、見たことある顔。多分」

俺はズルッと古典的リアクションをし、

「多分かよ」

「私はクラスの百分の一くらいしか顔を覚えてない」

と、早崎は薄く笑い胸を張る。ジャージ越しでもボリウムを感じさせる胸がより強調され……って、

「うちのクラスそんなにいないから！　どんなマンモス学級！？　百分の一ってもはや顔のパーツの一部しか覚えてないだろ。というか何で自慢げなんだよ」

「そう。その死んだ魚のような目だけは覚えている」

「目だけかよ！？　酷い言いぐさだな！」

まあ、子供の頃から『やる気を見せる』と先生から目を見てよく言われてきたが。幾ら一所懸命やっても言われたのはショックだったな。

「で、誰なの？」

「ああ、俺は新堂要。……ってヤバイ」

こんな悠長に話をしている間に刻々と乾麺は水分を吸って食べ時を逃してしまう。

俺は腰を九十度に折り頭を深く下げ、頭より高い位置でパンと手を打った。

「頼む。箸を貸してくれ！　一生のお願いだ！」

「……………は？」

ズルズルズル。モグモグモグ。

うん、涙が出るくらいに美味しくはない。麺とスープの状態からして三分オーバーといったところか。うどんにしとけばまだマシだったか。

「何でカップラーメン持ってきてるの？」

呆れたように早崎は俺を見上げ聞いてくる。

俺は部屋に上がらせてもらい、座るスペースもなく立ち食いでラーメンを啜り、早崎はパソコンが置かれた机の前に座っている。

「話せば長くはならない。しいていうなら時間の有用活用だ。それと、箸は洗って返す」

「ハンカチじゃないんだから……というか捨てて。割り箸だし」

こんな見事に割れたのに捨てるのは勿体ない気もするが。ズルズルズル。

「それで、私の隣の席らしい新堂かなめが何の用？」

「何故フルネームなんだよ。つか、呼び捨てかよ」モグモグ。

「リアルで人の名前呼んだことないから。私のことも呼び捨てで構わない。様付きでも可」

「何様ですか……」

しかも、淡々と友達つき合いがなかったような事をカミングアウトされたな。呼んだことないって……今まではどうしてたんだよ。

「先生には先生、両親にはお父さんにお母さん、弟には貴様と呼ん  
でた」

弟が不憫だ。俺は食い終わったカップめんをとりあえず台所に置いて……置けないから持ったまま、

「……友達は？」

「いない。いたことがない。リアルでは」

「リアルでは？」

「しいていうならゲームが友達」

うわあ……イタい子がここにいました。友達は簡単にはできないと俺は知っているが、いたことがないと事も無げに言うなんて涙を  
禁じ得ない。

「何で泣いているの？」

「いや、何でもなし。……ところで早崎は一人暮らししてるらしい  
がどうしてなんだ？」

涙を袖で拭いながら、話題を変えようとした質問だったが、高校生が安アパートで一人暮らしというのは海よりも深い理由があるかもしれないし、踏み込むべきではなかったと後悔する。

「私の両親が……」



早崎は、壁際、パソコンの方を向き、ため息を挟む。マズかった質問だったか……

「……ネット回線を引かせてくれなかったから」

「……は？」

「それで実家からじゃ通学に不便な高校に進学して、一人暮らしをさせてもらって、仕送りをやりくりしてパソコンを買って、回線を引いたの」

「何でそこまでしてネットしたいんだ」

涙なくしては聞けないような話じゃなくて安堵はしたが。

「ネットゲームしてみたかったから」

淡々と早崎は答えた。

「ネットゲーム？」

聞き馴染みのない単語に俺は首を傾げた。俺は家庭で禁止令が出てるわけでもないが、ゲームには関心がなく知識が薄い。しかし、それでも単語ごとの意味は理解できる。

「ネットは網で、ゲームは遊びだから、網で遊ぶって事は、つまりは虫取りだな！」

俺は導いた答えを自信ありげに突きつける。意外にも早崎はアウトドア派だったのか。更には子供心まで持ち合わせた。

早崎は少しむっとしたように眉を寄せ、

「アホ。バカ。アホ。腐れ」

「ちよっとボケただけなのに酷い言われようだな」

「……そうだったんだ。ごめん」

急にしおらしくなり早崎は頭を下げる。こつも素直に謝られると俺の方が悪く思えてくる。

「いや、俺も下手なボケだった。すまん」

「私も、リアルでそういう会話したことないから……こんな程度の低いボケをする人がいるなんて知らなかった」

「俺をそんなに貶したいのか」

それより、さっきから聞く“リアル”ってなんだろうか。それよ

りも俺は部屋に上がり込んでからずっとしたいことがあった。

一人暮らしの同級生の部屋で、俺は体がか疼いてならない。俺は早崎に真剣な眼差しを向け、言った。

「この部屋を片付けさせてくれ」

## 第二話『ネットゲームって、なんですか？』

俺の両親は共働きで、朝から夕方まで家には居ない。そのため、小学生にあがると必然的に鍵っ子となり、学校から帰ったら家で留守番をしていることがほとんどだった。

妹は保育園に通っていて、仕事を終えた母さんが迎えに行くから、妹が小学生になるまでは一人で過ごしていた。

寂しくなかつたといえば嘘になる。その寂しさを誤魔化すためか、或いはこのままだと家はゴミ屋敷と揶揄される未来を子供ながらに危惧したのか、俺は自然と帰宅したら家事をこなすようになった。

一戸建ての我が家は外観は清潔感溢れる白を基調としているが、一步玄関ドアを開けばゴミ袋が迎えてくれる不潔な空間だった。居間には脱ぎ散らかした衣服、キッチンには食べカスがごびり付いたまま放置された食器、掃除も休日にしかないため棚を一撫ですれば小うるさい姑も言葉を失うであろうくらいに埃が溜まっている。つまりは両親共々、生活能力が著しく低かった。食事にしても俺が作らなかつたら添加物まみれの不健康な食生活になっていたと思う。

とまあ、そんなわけで俺は幼くして家事を担うようになった。嫌ではなかつた。

家の中が見違えるほど綺麗になるのは快感でもあつたし、料理も上達していくのが楽しかった。何よりは両親に褒められたのが嬉しくて俺は帰宅後は主婦業をこなすのが当たり前になった。

こういうことをしてたから同級生との話題も合わなくて、次第に距離感が生まれていったんだよな。おやつ時のワイドショーの話なんて小学生が食いつくわけがない。

今となつては俺はそこいらの新米主婦は目じゃないくらいに家事は上手いと自負するまでになった。

そんな生活をしてきたせいだろう。

俺は酷く汚ない部屋を見ると綺麗にしたくなってしまつようになつていたらしい。いや、こんな惨状を目の当たりにしたら誰しもがそうなるか。

「早崎、ゴミ袋はどこだ？」

「多分、その辺だと思つ」

と、パソコンに向かったまま早崎は衣服が積まれた山を指さす。

俺はその山を崩しに掛かる。スウェットにジャージと、恐らくは部屋ではほぼこれで過ごしているのだからと思われる衣服をかき分けていくと、少し手触りが違つのが……

「……………」

思わず摘んで目の前まで掲げて眺めてしまつそれは、まぎれもなく女性が年頃になると胸に身に着けるアレである。近年は男も着ける人もいるとテレビで観たことがあるが、男の胸には紛い物じゃない限りブカブカになるであろう大きさだ。

「……………新堂かなめは変態だった」

ビクンと背筋を張り、ゆっくりと振り向くとノートにペンを走らせる早崎が。

「何を書いてるんですか、早崎さん」

「変態が生まれた瞬間を。事細かに」

冷静に早崎は言う。校内でもポーカーフェイスを貫いてるが、自分の下着を見られてもそれは変わりない。

「いや、違う！ 誤解だ！ それをよこせ！」

俺は必死に否定して、膝で早崎ににじりよる。

「寄るな変態」

冷たく言い放ちながら早崎は俺の顔面を足蹴にして突き放す。

俺はとりあえず正座する。右手にブラをまだ握っているのに気付き、衣服の山に放つた。

「まあ、ついまじまじと見てしまったのは謝る。だが、その辺に置いてくのもどうかと思うぞ」

「変態は見苦しい言い訳をした」

「すまん。俺が全面的に悪かった！ だから書くのはやめてくれ！」  
俺は畳に頭を打ち付けて何度も土下座する。

「そう」

パタンとノートを閉じる音が聞こえ、俺は顔を上げる。

「新堂かなめは、これを公開されると困るのか？」

ノートを指して早崎は聞く。

俺の半ば冤罪的な行為が記されたであろうノートがもし公開されたら

「……いや、あまり困らないか」

「どうして？」

「自慢じゃないが俺はそこまで学校じゃ全く目立ってもないし好感があるとも思っていないしな。そのくらいの汚点は大したことはない。それにノートに書かれたのくらいじゃ噂話程度までしか広まらないだろうし」

「ツマンない」

ガツカリした風でもなく早崎はノートを放り投げる。そしてパソコンに向き直り黙ってしまう。

クラスじゃ少し変わった奴だと思っていたが、それ以上に変な奴かもしれない。

だが不思議と、もう関わらないほうがいいとは考えなかった。それどころかまだ放したいという気持ちまである。人付き合いが希薄な者同士だからだろうか。

俺はそんな考えにいたった自分に苦笑して首を傾げ、掃除の続きに取りかかった。

「ふう」

俺は大して流れてもいない額の汗を拭う真似をし、満足げに部屋を眺める。

一時間前の写真撮っておいでビフォーアフターを比べてみたいにくらいに部屋は見違えた。

雑多な物に埋もれていた畳全体が姿を表し、食器が片付けられたシンクは輝きを取り戻した。トイレ掃除もしたし、これで誰に見せても恥ずかしくない部屋になったな。

まあ、俺が勝手にしたことであるから感謝を要求することはないが、部屋の主には少しでもこの状態を維持するよう努めてもらいたい。

部屋の主は俺が黙々と片付けてる間、黙々とパソコンに向かっていて、今も精巧な日本人形のように繊細な黒髪に覆われた後ろ姿に動きはない。

というか、一つ疑問がある。それは俺が何の関わりがない早崎の家に来た理由の一つでもあり、先程からおかしいとは思っていた。

「ところで早崎、風邪の方は大丈夫なのか？」

綺麗というより不健康という印象を与える白い肌色は元々だし、それ以外の様子は病欠するとは思えないほど問題なさげに見えた。今日で三日連続休んでるからだいぶ酷いとも想像していたが。

布団も押し入れにしまわれていたし、俺な中に一つの仮説が生まれつつある。

「……風邪？」

振り返ると早崎は何のことかというように怪訝そえに眉を寄せる。「風邪で休んだと聞いたからプリントを持ってきたんだが」

「ああ」

早崎はたった今思い出したかのような薄い反応を見せ、

「ケホケホ。頭が頭痛で痛いし、鼻水も止まらないし、もう死ぬかも。葬式は家族以外誰も来ないと思う。私の灰は海に流してほしい」「いや、どう見ても仮病だろ。鼻水流してないし！ 少しはそれっ

ぼくしろよ！　というかどんなネガティブ思考だよ」

「……バレたか」

探偵物の的外れな答えしかださないへっばこ刑事でも分かる嘘でバレルも何も。

「何で仮病なんか使ってたんだよ」

クラスじゃ孤立気味だとはいえ、授業は真面目に受けている早崎が仮病を使って休む不良少女だったとは意外な事実だ。今までの休みもそれだったのか？

いや、もしかしたらそうせざるを得なかった並々ならぬ事情があるかもしれない。

「アシユラナイトを狩ってた」

俺には早崎が何を言っているのか分からない。飼ってたにしても買ったにしてもその前の言葉が意味不明だ。

「やっと装備可能レベルに達したから、鬼神の剛剣を手に入れたくて。アシユラナイトはベリオスの墓にしかないし、沸きも一時間に一回でドロップ率も低いけど、今朝ようやくゲットできた。羨ましいか？」

ますます意味が分からない。

自慢げに豊満な胸を逸らされても、俺の頭は疑問符だらけでちんぷんかんぷんだ。頭痛がするのは俺の方だ。

「悪い。俺には早崎が何を言ってるのか分からない」

「分からない？　外国に軟禁でもされてたの？」

「日本語がじゃねーよ、外国にも行ったことがないし軟禁もされていない。分かり易く説明してほしい」

「面倒臭いけど……掃除してくれた礼に説明してあげる」

気にしていない様子だったし、迷惑かとも思われてんじゃない不安もあつたが感謝してくれてたのか。

「ああ、頼む」

「で、何が分からないの？　アシユラナイトの沸き場所？　鬼神の剛剣のステータス？」

「全部だ」

「……全部」

早崎は呟き、心底面倒臭そうに僅かに顔をしかめて髪の毛を手でクシャクシャとかき乱す。

「新堂かなめ。MMORPGは知っているか？」

「えむえむおーあーるぴーじい？」

早崎は深いため息を吐く。

「知らないか」

駄目な生徒認定された気分になった。

「バカにするな。RPGはロールプレイングゲームの略称だろ？」

「そんなことは常識。ゲームやったことある？」

「オセロなら得意だぞ」

「……テーブルゲームじゃなくて、家庭用ゲームとかのことに決まっている。まさかまた程度の低いポケだったのか？」

冷たい瞳を向ける早崎の疑問は流して、

「家庭用ゲームというと、ファコンとかだろ？一度もやったことないな」

「その伏せ方だと父親大好きな人みたい」

早崎は訳分らないことを言ったが、ここも流しとくべきだろう。

「新堂かなめ……本当に高二なのか？」

怪訝そうに早崎は半眼になる。

「紛れもなく高二だが？何故んなことを聞くんだ？」

「ファコンを例に出したから。普通の高校生ならプレテ、せいぜいスーアミを思い浮かべるはず」

「俺のゲームの知識はそのくらいしかないんだが……おかしいのか？」

「別にいいんじゃない。とりあえずゲームは全くやったことない、でいいの？」

「まあ、そうなるな」

早崎は会話のキャッチボールを一旦止める。俯き加減でどこから



説明すべきかと思案しているような間を置いて、

「新堂かなめは、ネットゲームすら知らないってことか」

どこか小馬鹿にされてるようなニュアンスが含まれている気がするが、早崎の表情からは読み取れない。

「ああ。あと、呼び捨てなのは構わないが一々フルネームで言うのはやめてくれ。名前か名字どちらかにしてくれ」

俺が言っていると、早崎はパツチリしてるとは言い難い目を見開いて、顔を逸らした。

「……人の名前を呼ぶのは慣れてないと言ったのに」

「だけど、呼びにくくないか？」

早崎はチラリと俺に顔を向ける。

「別に。……けど、そうした方がいいならそうする」

「じゃあ、そうしてくれ」

「うん」

と、早崎は姿勢を整え膝に手を突いて俺を真正面に見据える。まるでこれから重大なカミングアウトをするかのような緊張感が速見から伝わり、俺もつい固唾を飲んでしまう。一瞬、ここまでの会話の流れを忘れそうになっていた。早崎が口を開くまでの数秒間が数十秒にも感じたその雰囲気のせいだろう。

「……かなめ。……で、いいか？」

小さな声だった。それから確認するように聞いて早崎はそっぽを向いた。

「ああ」

俺は言いながらも軽く感動を覚えていた。実の所、異性から名字ですら呼び捨てされたことはなかったのに、（妹を除いて）それを乗り越えて名前で呼ばれるとは予想外だった。

「……で、早崎。話の続き」

「伊織」

続きを促そうとしたところ早崎は遮ってそう言った。

「そう呼んで」

無機質とも思える黒い瞳を向け淡々と速見は言う。呼んでもいい、ではなく望むような言い方。

「いや……そんないきなり……」

俺は戸惑った。呼び捨てにされるのは初めてであるし、当然異性を呼び捨てにした経験は皆無だ（妹を除く）。早崎はどう思ってるのかは解るはずもないが、この数時間でそこまで距離感は縮まってるはないだろうし、下の名前を呼び捨てにされるのは普通は嫌なものじゃないのか？

「私だけ呼ぶのは不公平だし。かなめもそう呼んで」

「じゃあ。……伊織」

なんか凄く気恥ずかしい。陳腐な青春ラブストーリードラマの主役になった気分だが、照れてるのはどうやら俺だけらしい。

「それでいい」

伊織は満足げに頷いていた。

伊織はやはりちょっと変わっているが、それでも俺は距離が縮まった気がして嬉しくもあった。

### 第三話『MMORPGって、なんですか?』

「で、早……伊織……さん。ネットゲームってなんででしょうか?」  
初めての経験(クラスメイトの異性を名前呼び)での緊張でつかしこまった態度になってしまった。

「“さん”はいらない」

「悪い。じゃ改めて聞くが伊織、ネットゲームってなんだ?」

「インターネットを介して多人数でプレイできるゲーム。正確にはオンラインゲームと呼ぶみただけ。略す時はネットゲが一般的だと思います」

抑揚のない声で伊織は説明的に言った。

「どこの世界の一般だよそれは。もしくは俺が外れているのか?」

「えっと、つまりは……どういうことだ?」

「かなめは本当にバカ」

早崎伊織は口が悪い。というのは俺が今日初めて知った情報だが、ネット……オンラインゲームに関しては全然理解できてないし、反論できない。『バカと言ったほうがバカなんだ』と返したところで子供じみた言い争いにすらならないだろう伊織の場合は。

伊織はいかにも面倒だけど仕方ないという類の嘆息を吐き、

「じゃ、チャットは知ってる?」

「アレだろ? ネット上で会話しあうっていう。聞いたことはある  
唯一の友人からな。割と多趣味な奴で以前にチャットで寝不足だぜ、と欠伸をしながら愚痴られたことがある。」

「そう。オンラインゲームはそのゲーム版みたいな感じ。ネット上の人とリアルタイムで同じゲームをする」

「ええと、その相手は知り合いなのか?」「リアルなの? 中にはそういう人もいると思うけど、基本的には知らない人」

「……ネットでそんなことができたなんて初耳だな」

「パソコンあるの?」

「一応な。親父から貰ったノートパソコンが部屋に。あまり使っていないが」

家事を任せきりだからとお詫びとご褒美と誕生日と入学祝いを込めて去年貰ったが、元々そんなに興味はなかったから閉じている時間の方が長い。最新型ではあるらしいが俺には何が新しいのかは分からない。

「それならオンラインゲームは普通知っているものだと思うけど」  
「別に欲しくて貰ったわけじゃないし、あまり使っていないからな」  
「あまり……エロサイト巡りとか？」  
「なっ!？」

少し考えてから伊織はとんでもない憶測を放った。突飛な思考過ぎるだろ。

「違う?」

「……まあ、その話はいいじゃないか」

全面的には否定できないから俺は話を逸らした。

「男は皆そうだと仲間がいつてたけど、かなめもそうなのか」

「その話はいいつて言いましたが!？」

「……そう」

と、伊織は口元を緩ませた。薄笑いといえはいいのか。言わなくとも分かっているという生温かい優しさが垣間見える表情だ。初めて見た伊織の笑顔が俺のネット事情を察せられてとは何とも言い難い気持ちになる。

「話戻すけど」

逸れたのは貴女が原因だと思えますが。

「そのオンラインゲームの中でもっとも賑わっているのがMMORPG」

出た。意味分らない言葉その二が。

「えむえむおー……えむ、えむ、おー！ エイエイオー！ ……あ、なんて……すみません」

伊織が絶対零度の瞳だったから、俺は空気を読んで謝った。自分

でもスベる予感はあるから傷つきはしないさ。

「MMORPGはマッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲームのこと」

単語を並べられたところで俺には何も伝わりはしないぞ。これを訳していけば分かるのか？

「多人数参加型オンラインRPGっていったほうが分かり易いけど」「いや、それでも今一ピンとは来てないが」

俺がゲームもネットの知識も乏しいのはさて置いて、伊織の説明は飛ばしすぎてる気がする。

織田信長？ 誰、スケートの選手？ と首を傾げるような人に対して本能寺の変というのは明智光秀が と説明するような。まあ、戦国時代を学ぶに欠かしてはならない人物を知らない奴はいないだろうが。

「多分、実際に見たほうが早いと思う。かなめに教えるには馬鹿でも分かるMMORPG入門が必要そうだし」

「そんな本があるのか」  
今度見に行ってみるか。

「……皮肉」

ボソリと言つて、伊織はパソコンに向かう。俺は気になりハイハイするように伊織ににじり寄り、画面をのぞき込もうとして、

「私の後ろに立つな。あっち行つて、後で呼ぶから」  
伊織に振り返らず名づてのスナイパーのようなことを言われ、俺はバックして部屋の中央で正座して待つことにした。

片付けて改めて見回すと殺風景な部屋だなと感じた。高校生の女子の部屋を見たことはないが、さすがに伊織は極端な例だろう。

まるで歌詞のように、部屋にはテレビもなく、ラジオもない。あるのはゴミ箱と台にすら置かれてない電話。ハンガーも足りてなく、畳んだ衣服は重ねて邪魔にならない位置に積んどいた。

今度、百円ショップで適当に整理整頓に便利な品でも買ってきてやろう。ちなみに制服は壁に掛けてある。

先程まで絨毯代わりかと思えるくらいに床に敷かれていた雑誌類も、俺がイメージする一般的女子像とは違った。女子のカリスマとも呼ばれるようなモデルが表紙ではなく、これが俗にいうオタクが萌えなどと言ってしまうのだろう、髪の色がおかしいアニメキャラのイラストが表紙を飾っていた。

この見えそうで見えないキワドいポーズが いや、そんな描写はどうでもよく、伊織に聞いたところPCゲームの情報誌だそうだが雑誌の他に部屋にある娯楽と呼べるものは、伊織が現在向かっているデスクトップパソコンだ。

モニターとキーボードが机の上に置かれ、他に物の置き場がないくらいにスペースを占領していることから、待遇の違いが窺える。一人暮らしを選んでまで伊織がしたかった『オンラインゲーム』をプレイするために必要だったからだろう。

だが、俺としては食事は机の上に並べて行儀よく食べてほしいが。「かなめ」

伊織が今までよく生活できてたなと呆れていると、伊織に呼ばれて振り向いた。

「これ」  
と、伊織は少し横にズレてパソコンの画面を見るように促す。俺は画面に近寄った。

「……なんだコレは」  
画面に映り出されている光景に愕然とした。ヨーロッパ辺りの街並みを彷彿させるような恐らくは石造りの建物が、こちらを向いて立つ人間の背後に見下ろすように建ち並んでいる。さすがに実写とは思わないが、これがゲームとは……背後にある噴水の水しぶきもリアルだし。

「驚きすぎ」

「これがMMOというやつなのか？」

「そう」

「凄い綺麗だな」

「普通だと思っけど。スペックもそんなに必要じゃないし」  
「そうなのか？」

最近のゲームはここまでリアルな映像になっていたとはただただ驚くほかない。空の雲も本物の空と同じように流れているし、画面に映る人間も八頭身のスタイルのいい美女だ。

「PS2くらいのグラフィックでそうなら、最新機のは涙流すかも」  
「PS2……一応は聞いたことがある気がするが、最新機なんてのが出てるのか？」

俺が首を傾げると、伊織は呆れ果てたように首を振る。長い髪が動きに合わせて揺れて顔に掛かる。伊織は髪を顔の横に払いながら、  
「それは、アホでも分かるゲーム入門でも読めばいいと思う。今は関係ないし」

「そんな本があるのか」

「……………今居るところはセントラルだけど……一応、一番人が集まる街。で、突っ立っているのが私のキャラ」

「伊織には似てないが」

画面に映るキャラはセミロングの茶髪で顔も伊織とは全く似てない。

「さつき適当に作ったばかりだから。顔グラとかは初期のまま。名前も適当だし」

「頭の上のこれか？」

キャラの頭上には青い文字で『ああああいう』とある。こんな名前を付けられたら俺は親の愛情に恵まれなかったと嘆き家出。そして改名する。

「ああああああ”にするつもりだったけど使われてたから無理だった」

「いや、ちゃんと名付けてやれよ」

幾ら適当でも、『あい』とか、打つにしても楽でそれらしい名前は付けれるだろうに。

「これだけだと無知のかなめには一見普通のRPGにしか見えない

と思うけど」

「……普通のRPGというのが分からないんだが」

「さつきから、ああああいうの近くを通るキャラ見てると思うけど、何だか分かる？」

暇を持て余したのか背伸びをしたりしているああああいうの前を通り過ぎたり、後ろを通り過ぎるキャラが先程から目に付く。質素な服装のああああいうとは違い、奇抜な服装のキャラだ。

「この、ああああいうが伊織のキャラなんだろう？ だったらゲームの中にいるキャラなんじゃないのか？」

「NPCのこと？ 確かにゲーム内にいるけど、この人達は違う」

「じゃあ何なんだ？」

「プレイヤー。ああああああいうと同じ」

俺は画面に映ったキャラを指さし、

「というと、こいつも伊織のキャラなのか？」

「違う。同じゲームをしている他人。例えば、かなめが今の時間自分の部屋でこのゲームをプレイしていたとしてこの場所に来ていたら、ああああいうがいる」

頭がこんがらがって来たが何となくは理解が追いついてきたぞ。

「つまりは動き回ってるキャラは、今どこかでこのゲームをプレイしているということか？」

「うん。ネット上に構築された一つの世界に集まってる。そんな感じ」

そう言われるとたかがゲームなのに随分と壮大な気がしてくるな。

「じゃ、この世界の人口は何人くらい居るんだ？」

画面内には朝の駅前を彷彿とさせるくらいにひっきりなしにキャラが通り過ぎる。これまた朝の通勤ラッシュのように皆一様にせわしなく走り、突っ立ち続けた挙げ句に座りだしたああああいうが浮いている。

「十万人は越えたと公式で発表されていたけど。三ヶ月くらい前だし正確には分からない」



「じゅうまん……」

この街の人口と同程度だと。

「中には五千人越えてるのもあるけど。全世界で」

「ごせんまん……」

全世界の五千万が同じゲームをしてるなんて想像できん。

「十万と五千万だと今やつてるゲームが途端に少なく感じるな」

「これは日本限定だから多い方」

「そうなのか。十万人が集まって同じゲームをしているなんて凄い時代だな」

「あくまでも登録数だし、プレイする時間帯やサーバーも分けられるから実際に十万人も集まることはないけど」

「多人数参加型の意味は大体理解できてきたが、まだ分からないこともある。」

「このゲームで何をやるんだ？　さらわれた姫でも助けに行くのか？」

「色々。レベル上げたりしてキャラを育てていくのが基本だと思うけど、他にも生産作業を専門にしたり、レアアイテム入手に励んだり、プレイスタイルは人それぞれ」

「俺のネタは見事にスルーされた。知っている数少ないゲームネタなのに。」

「奥が深いってことか」

「そう。一つでも拘ると時間掛かるから中々辞めどきが難しい」

「……もしかして、休んでる間はずっとやってたのか？」

「安心して。ご飯はちゃんと食べてる」

「それはよかった　じゃねえよ。いや、大事だけど。少しは悪びれる表情してくれ……」

無表情で何故と小首を傾げる伊織に、呆れを通り越して感心してしまう。伊織にとってゲームは学校より優先することなのか。

「そんなに面白いのか？　これ」

ゲーム画面を見ると、伊織のキャラは座ったままゆっくりと頭を

垂れて船を漕ぎ、寝息を立てていた。

「興味あるの？」

伊織の表情が微妙な変化を見せた。僅かばかりだが光が射したような。

はつきり言って興味はなかった。単に深い考えもないパツと口から出た疑問だったし。

だが、ないと答えるのは躊躇われた。

伊織の表情にしてもそうだが、共通の話題が出来たら伊織と仲良くなれるかもと思った。

教室でいつも一人の伊織を見かねた……のも少しはある。友達のない寂しさは俺は分かるし、伊織も同じ気持ちはあるだろう。俺の憶測でしかないが。

「ある」

俺はキツカケになればと、強い意志を込めてそう言った。

## 第四話『ネットゲーム、買いました』

「六千八百円か……」

場所は駅前の家電量販店。そのパソコンコーナーでうなだれる俺。

事前に伊織に聞いていたとはいえ、実際に値段を見ると高いと感じてしまう。人生の半分を主婦業に費やしてきたせいかな金にシビアになってるのもあるかもしれない。

『CROSS・FANTASIA』

剣を構えた青年と弓矢で狙いを付ける少女が描かれたパッケージに印字されたタイトルと、メモに記しておいたタイトルを見比べ目当ての品に間違いがないことを確認。

パッケージを手にとって次に、あれば便利と言われたコントローラーを探しに向かう。

軽い気持ちで興味があると言ってしまったが、オンラインゲームというのは随分と金が掛かる娯楽だ。

『長期的に見たらコストパフォーマンスはいい方』

とは伊織談。

果たして俺が長期的に楽しめるだろうか……そんな不安を息にしながら周辺機器売場に着いた。

昨日のことだ。

伊織に呼び出された俺は再び『くずれ荘』へと訪れた。今回は「名は体を表す」と一言呟いて敵かに頷いてから敷地へと踏み入った。余談だが俺は少しばかりドキドキしていた。呼び出された経緯が

アレだと、たとえこないだのネトゲの話の続きだと分かっても、男としては宝くじで億万長者になるくらいの微かな期待をしまっただけだ。

初めて伊織の部屋に訪れた次の日。伊織はきちんと登校してきた。俺の挨拶を『馴れ馴れしい』とばかりに無視して、窓際の席に着いて文庫サイズの本に目を落とすのはいつもの姿だ。

孤独な文学少女というイメージで見えていたが、後に読んでいたのはネトゲの攻略本だと知った。

仮病とはいえ三日も休んだ伊織に誰も心配の一声もかけないのを見て、俺は哀しい気持ちになったのを思い出す。

そして伊織は学校を授業を受ける場ではないと言わんばかりに、帰りのホームルームが終わった後一番に教室を出ていく。

俺は話しかける機会を窺っていたのだが、声を掛けても顔を挙げはくれなかった。無視なのか、本に集中していたからかは分からないが、結局会話を交わさないまま俺も帰ろうとして下駄箱を開けると一枚の紙を見つけた。

ノートのページをちぎって四つ折りにされたそれを素早く制服のポケットにしまい込むと、何食わぬ顔で帰路に着く。

生徒の姿がまばらになったのを確認してから俺は紙を開いた。それには意外と上手い手書きの字でこう書かれていた。

『明日、部屋に来い』

一瞬果たし状かと思った。命令形だし。その文字の下には早崎伊織とあった。

幾ら携帯電話を持ってないとはいえ、他に方法はなかったのだろうか。

隣の席なのだから、授業中にちよいと紙切れを渡してくれると出来ただろうに。恥ずかしかったか？

顔を赤らめる伊織を想像しようとしたが、上手くできないまま俺は二〇四号室のドアをノックした。

「オンラインゲームには二種類ある」

「一昨日と変わらずジャージ姿の伊織は言った。ちなみに、何故遠回しな呼び出し方をしたか聞いたが『別に』と答えにもなっていない。素っ気ない言葉が返ってきた。」

「二種類？」

「俺が伊織のプレイしているMMORPGの始め方を訊ねたら、こう返してきた。」

「無料と有料」

「タダでできるのか？」

「俺はセコい性格ではないが無料という言葉にはつい反応してしまう。」

「一応はね」

「伊織はやや不機嫌そうな口調になり、」

「けど、結局は金を払わないと不利なシステムのゲームが多いから、入れ込むなら実質は最初から有料のより高くつくのも多い」

「そうなのか。上手い話はないってことか」

「うん。無料でもやれないことはなかったけど、効率はかなり悪かった」

「伊織の経験談らしい。」

「で、伊織のやってるのはどっちなんだ？」

「有料」

「幾らだ？」

「金が掛かるのは予想の範囲ではあるが、実際にどれくらいなのかは予測していない。調べればいいのだが、伊織に聞けばいいかと思しなかった。」

「月額は五百円だけど」

「へ？ 月額？」

「予想外の言葉に俺は目を丸くすると、伊織は冷めた口調で、」

「有料と言ったけど。かなめは数秒で忘れる猿以下の頭なのか？」

「いや、ゲームだからってつきりソフトを店で買ったりするもんかと。」

その金額が有料ということなるかと考えたんだが」

伊織は点けっぱなしのパソコンを一瞥し、

「ソフトはダウンロードするのが多いけど、このCROSS・FANTASIAはソフトを買ってインストールするタイプ。ダウンロードの場合は月額料金しか掛からないけど、買う場合はもちろんソフト代が掛かる」

「随分と高くつくな」

「初期投資はそうだけど、月額料金は安い方。他のMMOだと千円台が一般的」

伊織の感覚だと安く思えるのかも लेकिन、俺からしたらソフトを買った後も金が掛かるといっただけで高い気がしてくるんだが。まあ、小遣いを圧迫する額ではないしな。元々余るくらいだし。

「で、そのソフトはどこに売ってるんだ？」

「ただいまー」

取り立てて特徴の平凡な一戸建てである新堂家に帰宅し、突然の来客や宅配便も恥ずかしくない掃除が行き届いた廊下を通り、リビングに入る。ここを通らないと二階の自室には行けない造りになっている。

「おかえり。かなめ」

「ただいま」

ソファーに寝転がりながら迎えてくれたのは新堂ひより。俺の妹だ。サバサバした性格で言動や行動に女らしさはほとんど感じられない。せめて一度くらいは『お兄ちゃん』と呼んでほしい願望がある。

喉を潤すかと、買ってきた品が入った袋を置く音にピクリと反応し、ひよりはデニムのショートパンツからすらりと伸びる引き締まった健康的な両脚を高く上げ、反動を付けて体を起こした。

ずっと寝転がり続けてたのを物語る、寝癖になったショートヘアを気に止めることなく、袋に視線を向け、

「何買ってきたの？ 食べ物？」

買った物をしてきたと分かると、ひよりはいつもこんな感じに聞いてくる。成長期も関係なく昔から食欲旺盛で、買ってきたお菓子は大抵ひよりの胃の中に消える。まあ、買ってこないとうるさいから普段はなるべく安いのは買うようにしているが、今日はスーパーには寄っていない。

「ちげえよ」

一言で伝え、冷蔵庫から麦茶を取り出して水分補給。

ひよりがそんだけ食っても太らないのは部活でエネルギーを消費してるからか、体質か。そのカロリーを少しは胸に回した方がいいんじゃないかと心配になる。今もTシャツの胸の辺りはまっ平らだ。伊織が中二の時はどうだったんだろうか。まあ、どちらもさしたる興味はないし、言って痛い目には合いたくない。伊織からは冷たい視線、ひよりからはもれなくハイキックが飛んでくるだろうし。

「何コレ!？」

と、袋からパッケージとコントローラーの箱を取り出していたひよりが叫ぶ。

「ゲームとコントローラーだが……ぐっ！」

「かなめ！ いったい誰に苛められてるの？ 言いなさい！」

しいて挙げるなら今俺の胸ぐらを掴んでいるお前だ。

「……どうして……そんな……飛躍した……考えになるんだ……」

首が締め息苦しい中声を絞り出すと、ひよりはパッと手を離れた。俺は首を手で押さえながらせき込んだ。あと数秒遅かったら危なかった。

「だって、かなめ、今まで全くゲームに興味なんか示さなかったのに、いきなり買ってくるなんて有り得ないし。だとしたら答えはクラスのいじめっ子に買うように脅されたしかない！」

自信満々に俺に指を突きつけるひより。俺はパシられるキャラに

見えてるんだろうか。少なくともクラスにジャインのような存在はない。……俺が見える範囲では。

「んなわけあるか。自分の意志で買ったんだよ。というか思考が突飛過ぎるだろ」

「けど、家にゲーム機なんか無いのに買ってくるとか。少なくとも何か事情を勘ぐるのが普通じゃん」

「ゲーム機は必要ない。パソコンでできるやつだし」

ひよりはソフトのパッケージを手に取り、裏面を確認する。

「ホントだ……って！ これオンラインゲームじゃん」

「なんだ。知ってるのか」

ひよりもゲームには詳しくないと思ってたから意外な反応だ。知らなかったなら先日得た知識を振りかざすつもりだったのに。

「かなめが知ってる方が意外なんだけど。それもオンラインゲームだなんてさ、どういう風の振り回し？」

ジト目で怪訝そうに見てくるのはいいが、

「風の吹き回し、な」

俺が間違いを訂正するとひよりの頬が赤く染まる。

「ちよつと勘違いしてただけなんだからっ！」

「はいはい」

必死に言い繕うひよりをなだめる。

「そ、それより、オンラインゲーム。なんで始めようなんて思ったわけ？ コントローラーまで買ったちゃって」

「友達から話を聞いてな。やってみようかと思ったんだ。というかなんでオンラインゲームなんて知ってたんだ」

勝手に友達としてしまったが、もうなってるといってもいいだろう。二回も部屋に行ってたんだし。

「友達の家でゲームの雑誌読んだことあったし」

「そうなのか」

「かなめは最近のゲーム知らないだろうけど凄いだから。野球なんてめっちゃリアルで、オンラインで対戦までできるんだから」



興奮気味にひよりは語った。

そう言われると俺が時代遅れの人間みたいだが、事実だから致し方ない。これから先端に立つがな。フッフ……。CROSS・FANTASIAは一年前に販売されたらしいし。

「実況でも付いてるのか？」

ひよりは呆れたように、

「そんなのとつくにあるってば。今のなんて選手は本物に近いし、野球中継を観てる感覚なんだから。ダルビッシュや田中の雄叫びまで再現されてたし」

興奮する部分が多少ズレてるような気がするが、最近のゲームの進化は伝わってくる。

「ところで、オンラインで対戦っていうと、自宅で居ながらにして全国の人とできるのでいいんだよね？ RPGじゃなくてもあるんだな」

「当たり前でしょ。今じゃオンライン対応は普通のことみたいだし。てゆうかなめ、そんなことも知らなかったの？」

妹よ無知の兄を蔑むように座った瞳を向けるな。人間誰しも最初は無知だ。お前だってサッカーのオフサイドのルールをよく理解してないじゃないか。

「まあな、知ったのは最近の話だし」

「そなんだ。けど、ホントさ唐突過ぎじゃない？ かなめがゲームをするなんて、余程しつこく誘われたとか？」

ひよりは俺の顔を興味深げに窺ってくる。

「そうじゃない。俺が話を聞いてやってみたいと思っただけだ」

「へえ」

ニヤケ顔で言いながらひよりは俺の周りをクルクルと歩き、一周して間近に顔を近づけてくる。しばし大きい瞳で見つめ、その目もニヤリと孤を形作ると、顔を放しズバリと指を突きつけた。

「その友達って女？」

「そうだが。ただの友達だ」

ここで下手に否定したり慌てたりすると、余計な誤解を与えかねないし淡々と答えてやった。

「そなんだ。けど、かなめに友達が出来るなんて凄いことじゃん」

「……まあな」

実はクラスの人気者なんだぜと強がりも無駄だろう。これまで俺の家に友達が来たことがあるのは一人だけだし。すぐバレる嘘だ。

「今日の夕食はあたしが作っとくから、かなめはゆっくり遊んでくれれば。オンラインだしいつしよにやるんでしょ？」

ひよりはニコツと笑って言った。珍しい気遣いだが、俺は素直にその好意を受け取ることにした。ちなみにひよりの料理の腕は俺よりもあると認めざるを得ない。

俺は一言礼を述べて、早速始めるかと自室へ向かった。

## 第五話『ネットゲーム、始めました』

俺の自室はベッドに本棚、それと机くらいしか描写すべき点がない殺風景な部屋だ。

特に趣味らしい趣味というのがないから仕方ない。だが、伊織の部屋よりはまだ気を払っているといえる。

本棚は埃が被らないようにカーテンで仕切っているし、衣服だつて放り出さずにクローゼットに収納してある。特に掃除に関しては、いつ意地の悪い姑に『まあ、こんな所に埃が。掃除もできないのかしら』と嫌みを言われぬように窓の棧に至るまで行き届いている。そんなことは今はどうでもよいことか。

俺は椅子に腰掛け机の上に置かれたノートパソコンの電源を入れる。

起動までの時間も無駄にはせず、大金をはたいて購入したゲームソフトを手にとってパッケージを開け中身を出す。教科書くらいの厚さの取り扱い説明書と、プラスチックのケースが入っていた。

まずはケースを包むビニールを取り……取り……やけにピッタリとひつついて……このっ……ようやく取れた。

ケースを開くとディスクが収納されており、それを左手で優しく取り出して、右手で起動し終えたノーパソのディスクドライブにセツトする。

するとウィンドウが開き、画面に映る手順通りに進めていくとインストールが開始された。

説明書に目を通さずにやるのはいささか不安があるが、伊織が『インストールには時間が掛かるから先にしてから説明書を見た方が効率的』と淡々としたアドバイスをくれたから信じるしかない。

俺はようやく1%になったインストール状況を横目で見て、説明書を持ってベッドに横になった。

俺は一息吐き、読み終えた説明書を閉じ、起きあがった。操作説明とかはともかく、世界観の細かい説明は果たして必要なのかと疑問に思う。

ゲームをより楽しむのには役立つかもしれないが、実生活では無用の知識だし。

架空世界の歴史を覚えたところでテストには出ないしな。騎士国の初代団長の名前を知るよりはこっちの歴史的偉人の名前を一つでも覚えたほうが役には立つ。少なくとも赤点の確率は減る。

「アーカム・ナイトハルト」

苦笑し、初代騎士団長の名前を呟く。

その人物の功績も相関図入りで詳細に書かれていたから、思わず読みふけてしまった。アーカムは偉大な騎士だったんだな……と感慨に耽るくらいに。

これらの知識はゲーム内で追々説明していくとして、暗転していたノーパソを少しイジると、インストールは既に完了していた。ベツド脇の小さな棚の上に置かれた時計に目をやると六時を回っていた。集中しすぎていたようだ。

「かなめー！ ご飯！」

階下より威勢のいい声が聞こえてきたし、続きは後でとノーパソを閉じて俺は部屋を出た。

腹を満たして、再び部屋へと戻ると、説明書に書かれた通りにゲームをプレイにするにあたってのアカウントを取得した。

いわば、CROSS・FANTASIAの世界に行くためのパスワードみたいなものだ。登録時に発行されたユーザーIDとパスワードを忘れないようしっかりとメモに取った。

月額料金の支払いについてだがウェブマネーが使えると事前に伊織から聞いていたから、予めコンビニで買っておいたのを利用した。千円分チャージしたからこれで二ヶ月はプレイできる。

いかにも知ってましたという体で説明したが、俺はウェブマネー自体、耳慣れない言葉だった。

『料金支払いはクレジットカードかウェブマネーでできる』

『クレジットカードなんて持ってるわけないが、ウェブマネーってなんだ？』

『無知の極みを目指しているのか？ かなめは』

『……絶対常識的な知識じゃないだろ。それは』

『面倒臭いけど』

こんな風に昨日伊織に教えてもらった。

簡潔に言うとおオンライン上で使うお金みたいな感じだそうだ。いやはや技術の進歩には恐れ入る。俺はてつきり利用料金は指定された口座に振り込むとか、運営会社に払いに行くのかと思ってた。

これでプレイ前の下準備は完了し、あとは気兼ねなくゲームをすることが出来る。

初ゲーム購入、初ウェブマネー、初オンラインゲーム、なにかと初尽くしのここ数日だ。そして俺はこれから未体験の世界へと飛び出す。CROSS・FANTASIAの世界へ。

説明書にかかれていた世界観を想起し、脇に置いたパッケージの裏面に躍る『今日からキミもエタナリアの住人だ！』という安っぽいキャッチコピーを目にし僅かながらもテンションが上がる。

マウスを操作しトップ画面に表示されたCROSS・FANTASIAのアイコンをクリックする。

交差した剣の上に大きく表示された『CROSS・FANTASIA』のロゴが出た画面はコントローラーのボタンを押すと変わり、次に表れたのはIDとパスワードを入力する画面だ。

引き出しからメモを取りだし、それを見ながらギコチナイ手付き

でキーボードを叩き慎重に入力する。間違っていないか確認して決定をクリックする。

そして冒険が始まる　という高まる期待を裏切るように『キャラクタークリエイイト』の画面に変わった。そういえば、説明書にもあったな。ちなみにキャラクターは三人まで作成可能だそうだ。

画面には男のキャラと女のキャラが並んでいて、性別を選択するみたいだ。当然俺は男を選んだ。

続いてフェイスメイキング画面になる。

平凡としか言い表しようがない男性キャラの顔のアップが画面の右半分であり、左半分には『髪』『目』などの顔の部分の名称が並び、それらを組み合わせで顔を作れるらしい。

まずは『髪』を選択すると男キャラの頭がアップになる。焦げ茶色の短髪だ。

『髪型』『カラー』『アクセサリ』と髪だけをとっても色々と変更できるらしい。まず髪型を変えようと選択すると……百種類以上あることを如実に示す数字が。

……キャラクター一人作るのにも骨が折れそうだ。

「……………ふう」

椅子の背もたれにくたびれた体を預け、一仕事終えたサラリーマンがごとく一息吐いた。時計を見ると時刻は九時を回っていた。

画面に映るキャラクターは俺を数倍格好良くしたような顔をしている。見栄を張ってるわけじゃない、自慢じゃないが俺はクラスでは中の上くらいに位置する顔だとは思っている。

悩んだ末に自分に似せたが、各パーツの種類は多岐に渡り種類も豊富だった。これだけあればさながらモニタージュのようにどんな顔でも作れそうだ。

そして体型も自分に似せた。百六十四センチの五十四キロ。同年代と比べると小さめで、画面に映るキャラも頼りなさげな印象を受ける。

ちなみに背は二百五十から百。体重は百五十から二十まで自由に設定可能で、むろんそれに合わせて見た目は変化する。

試してはないが身長が二百五十で、体重二十も恐らくは可能だと思うが……それは果たして人類だろうか。あだ名は電柱かモヤシになる可能性が高い。

そんな奇妙な生物の想像をやめて、姿勢を正して再び画面に向き合う。

容姿を決定すると次いで出てきたのは『名前を入力してください』という文字。

「名前か」

自由に決めていいのだろう、ネーミングセンスには自信がないのは自覚しているし、拘らずに自分の名前でもいいかと入力をする。

「……『その名前は既に使用されています』？」

そう画面に表示され、俺の名前は認められず再入力を求められた。要　なんて名前はそうありふれているとは思えないが。俺の知る限りじゃ俳優の名字くらいしか見た覚えはない。

平仮名にしても同じ表示が出た。かなめは人気なのか。

どうするかと、腕を組んで悩んでいると、ドアが開き、

「かなめ。電話」

と、既にパジャマ姿のひよりがコードレスの受話器を手に部屋に入ってくる。

「俺にか？」

眉を寄せ俺は訊く。坂本からなら携帯があるし、他に思い当たる人物はいない。

「うん。女の人、例の友達じゃないの？」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、受話器を手渡すと、ひよりは欠伸をしながら部屋を出ていく。明日も朝練があるだろうし、これから寝る

のだろう。

思い当たった人物の無表情を脳裏に浮かべ、俺は受話器の通話ボタンを押して耳に当てた。

「もしもし」

『登録はもう済ませたの?』

そいつは名乗りもせず唐突に言ってきたが、名乗らずとも抑揚のない声質は誰なのかを如実に証明しているようなものか。

「伊織、何で家の番号知ってたよ」

『クラス名簿に載ってた』

ああ。生徒の名前が五十音順に載ってるペラペラな紙か。確か電話番号も掲載されてたはずだ。俺のは一応はしまってたはずだが、伊織の部屋にもあったとは意外だ。てっきりクシャクシャに丸めてとつくにゴミと化していたものかと。

「で、登録だったか」

何なのかは言わずもがこのゲームだ。今日買いに行くことは伝えてあったし。

『そう。サーバーのこと言い忘れてた。したの?』

サーバー……サバ……鯖がゲームと関係があるのか? 味噌煮

にするのかとトボケたくもなったが口には出さず、

「いや。まだ終わってないんだが。今は名前入力のことだ」

『……サーバー選択はその次だから、さっさと入力して』

「けどな、既に使われてるみたいなんだが、どうしたらいいんだ」

『なんて名前にしたの?』

「かなめ。漢字と平仮名で入れたが駄目だった」

『オンラインゲームじゃよくある話』

「そうなのか?」

『漫画とかアニメの人気キャラの名前はすぐ使われるみたい』

「じゃあ、かなめって人気のキャラでもいるってことか?」

『知らない。……そんなに自分の名前を使いたいのか?』

「まあ、出来たら」



酷い名前で伊織に冷めた反応をされるよりはいいと思うし。

『名前が被ってる場合だと、適当な記号で挟んだりすれば使えることが多い。ダガーとか、ホシとか』

試しに入力して変換してみると、ダガー（十）ホシ（ ）と出る。これで挟めつつか……

『けど、それを格好いいと勘違いした厨二が使ってることも多いから、良いイメージは持たれないこともある。ま、かなめは厨二ネームというわけでもないし大丈夫だとは思っ』

中二ってそんなイメージがあるものなのか？

「……とにかくお勧めはしないってことか」

『うん』

「じゃ、伊織が考えてくれないか？ 俺はこういうのは苦手だし」

『面倒臭い』

即答か。

『カタカナは嫌なの？』

「どうせ駄目だろうし試しては」

だが、まだ入力してないしキーボードを叩いてみる。カ・ナ・メ、と、決定。

「あ」

俺の漏らした言葉で察したか、受話器の向こうで呆れたようなため息が漏れる。

『……次の画面出た？』

「ああ。プレイするサーバーを選択するみたいだが。これの話なのか？」

画面には。

- ・ノースブルー
- ・サウスホワイト
- ・イーストブラック
- ・ウエストイエロー

とある。サーバー名は東西南北に大国が栄えるという世界観から

きているようだ。

『そう。同じサーバーじゃないといっしょにできないから。移籍チケット買えば変えられるけど』

「同じ世界が四つあるってことだな。パラレルワールド的な。違う世界のプレイヤーとは遊べないわけか」

『かなめにしては理解が早い。たまに違うサーバー同士の交流イベントはあったりはするけど』

感心されてるのか皮肉なのか。伊織に猿並の知能だと思われるのだろうか。

「……伊織はどのサーバーなんだ？」

『ウエストイエロー』

「どうでもいい質問だが、何故そこにしたんだ？」

俺は騎士団のある方角のノースブルーが一番で、次いで白、黒といった選択順位だったか。

『人が一番少ないから』

「そんな理由でかよ」

『その方が狩場の取り合いも少ないし、マナーの悪いプレイヤーも少ないみたいだから』

「分かった。イエローだな」

『ん。待ってるから』

そう告げて通話が切れた。

意外と時間掛かったし今日はそろそろ終わるつもりでいたんだが。「じゃあない」

俺は九時半を示す時計を見てから、受話器を置いて、コントローラーを握りウエストイエローのサーバーを選択した。

『CROSS・FANTASIAの世界へようこそ！』

そんな明るいナレーションと共に、俺のネットゲームのある生活

が始まったのだった。

## 第六話『ネットゲーム、始めました』

短いCGムービーが流れ、それが終わると光に包まれ俺のキャラクター『カナメ』が画面上に表れた。

カナメが立つ場所に既視感があると思ったら、先日伊織の部屋で見ただけだと気付く。

遠くに広がるヨーロッパ調の景色をバックに噴水の前に立つカナメという構図はあああいうと同じだ。アレは急造で適当に作成したキャラだったらいいし、ここがスタート地点のようだ。

俺はコントローラーに視線を落とし、ボタンの配置を確認する。左側にあるのが移動に使う方向キーとカーソルを移動するスティックで、中央にはスタートボタンなどが幾つか並び、右側にはボタンが六つとこちらにもスティックがある。

様々なパソコンゲームに対応している汎用コントローラーだそう  
だ。  
ソフトに同梱されていた操作簡易表を見ながらコントローラーを

繰る。

動かした通りに俺のキャラが動き、画面はカナメを中央に捉えるように合わせて動く。スティックをグリグリと動かすとカナメを中心にしながらも視点が変わる。まるで幼い子が大人を見上げるようなローアングルも可能で、もし女キャラで短めスカートの場合中身が見えるのではないかと。大丈夫なのか？

そういえば、このゲームのパッケージには十五歳以上対象と書かれていた。こういうことも可能だからなのかもしれないな。

それにしても先日とは比にならない程に辺りを行き交う人が多い。カナメが現れた時のように光に包まれて出現する人もちらほらと見かける。

あの時は確か午後四時くらいだったし、学生はともかく社会人は一般的には仕事中の時間だ。今は午後九時半過ぎ。社会人が自宅で

くつろぐ時間帯だからログインする人も多いのだろう。

何気なく画面に映るキャラクターの頭上に表示された名前を見ていくと、外国人のような名前が多い。俺のように本名を付ける人は少数派みたいだ。

「あ……」

今、カナメの前を横切ったトゲトゲとした黒い鎧を纏う人の名前を見て俺はぼかんと口を開けた。

“十暗黒の霸王十”

イタイ。何がどうイタイのかと聞かれたら上手く答えられないが、とにかくイタイと感じた。伊織が勧めなかった理由が分かった気がする。

ところで伊織は一对どこにいるんだ。

待ってると言われたが、肝心の待ち合わせ場所は訊いていない。というより訊いたとしても、この世界は俺が都会に行くのと同様に右も左も分からないし、『騎士の銅像の前』とか言われてもどこにあるのか知らなければ行くことはできない。

電話して聞いて見るかとコードレス電話にチラツと視線をやるが、番号を知らない。クラス名簿はどこやったか　と記憶を辿っていると、ゲーム画面の左下にあるフキダシのアイコンがチカチカと瞬いた。

マウスでポインタをアイコンに重ねてクリックする。

これはチャットで、ゲーム内での会話文はここに表示される。空白が目立つメッセージウィンドウには、一言ことうあった。

ネピア：操作には馴れた？

緑の文字で表示されたそれに俺は首を傾げる。俺に話しかけてるのか？　ネピア　見覚えのない名前だ。

伊織かもしれないが、万が一人違いだったら恥ずかしいし、俺は不慣れな動作でキーボードを叩き、

『誰ですか』

と決定すると、カナメの頭上にフキダシが出る。

メッセージウィンドウにも白文字で表示されている。

『囁チャで話したほうがいい。凄く目立ってる』

ネピアから再度チャットが。囁チャってなんですか？ と、打

とうとしてると、

『メッセージに表示されてる名前に合わせて右クリックして、“ささやき”を選ぶはできる。多分、囁チャって何と首を傾げていると思うから先に説明するけど、ささやきチャットの略称。指定した相手にしか見えない会話のこと』

言われた通りにすると、幾つかの項目が表れ“ささやき”もその中であつた。それを選んで再びタイプする。

『先読みした説明どうも。一応聞くけど、伊織だよな？』

『もし違つてたとして、簡単に名前を出すのはやめたほうがいい。その人が伊織になりすます可能性も捨てきれないし、金を騙し取られるかもしれない』

まるで熟練した遊撃手のように素早い返球、もとい返信だ。本人と面と向かつて会話するより早いくらいだ。

『オレオレ詐欺みたいだな』

俺だよ俺と電話してきた誰かに祖母がうつかり「太郎かい？」などといった名前を言つてしまい、なりすまして騙すという手口はテレビで見たことがある。

『まあ、騙すならもつと金のある人を狙うと思う。念のため注意しとくけど、オンラインゲームで過度に個人情報バラすのは基本的には厳禁』

無機質な文字だけのやりとりなのに、脳内じゃ淡々とした伊織の声で再生されるのが不思議だ。

『今どこにいるんだ』

『噴水前』

コンマ何秒かという早さで返つてきた言葉を見て、噴水前へと戻

る。何人が動かずに立っているキャラがあり、その中から『ネピア』という名前を探し、すぐに見つけた。

目の前に立ち主観視点に切り替える。

サラサラと風になびく藍色のセミロング。目を隠すくらいの長めの前髪をシルバーの髪留めで額の辺りで止めている。大きめな目は瞼が半分閉じており、眠たげな印象を振りまいている。

確か120番にそんな目のパーツがあったが、選ぶ奴がいたとは驚きだ。自身に似せたのかとも頭に過ぎったが、カナメとさほど変わらない質素な服装の胸部はこれまた質素だ。

『全然かなめには似てないな。理想？』

ネピアは操作している人の内心をトレースしたかのように、唇の端をもたげて嘲笑する。画面の前に座る俺は苦笑を浮かべてるが、カナメの表情は変化しない。

『フェイスアクション機能。画面右の顔のアイコンを押せばできる』画面の右端にも携帯の絵文字を思わせる細かなアイコンが並んでいて、その中の顔のアイコン選択する。

すると『フェイスアクション』の画面が右半分に出る。怒り、笑顔、仏頂面、ウインク、など顔の表情が色々と選べるようだ。表情だけで言葉を交わすことなく意志疎通ができるであろうと思える数だ。その中からわざわざ嘲笑を選んだのか。

『ちなみに嘲笑はキーボードにショートカット登録してある』

そんな頻繁に使うとは思えないが。

『タイピング速いな』

俺は一々キーボードを確認しながら打ち込んでるからかなり遅い。格好つけてブラインドタッチなんかしたら、言葉にすらならないだろう。

『馴れれば自然と速くなる』

『ところで、そのキャラは新しく作ったのか？』

『そう。戻ってくるの面倒だったし、サブキャラ作るうとも思ってたから』

『何故その名前にしたんだ？』

『近くにティッシュあったから』

身も蓋もない名付け方だな。でも意外と悪くはない響きだ。まあ、真つ先にティッシュを想像するが。

『自分の名前じゃ駄目なのか？』

『メインキャラが伊織。カタカナは使用されてた。ゲームキャラにも何人かいるからかも。八神流古武術使いとか』

へえ。誰だそれ。

『で、何をすればいいんだ？ 狩りに行くのか？』

俺は右も左も分からぬ初心者だし、経験者である伊織に聞くのが最善だろう。

『そこに名前の横にフキダシアイコンが表示されてるNPCがいるでしょ』

ネピアが向いた方向にカナメを動かすと、少し離れたところに“キース”という名前のキャラがいた。黄色のフキダシアイコンが確かに見える。

『NPC？ アイドルグループか？ 48みたいな』

『ノンプレイヤーキャラ。このゲーム内に元々いるキャラのこと。会話だけの場合も多いけど、クエストとか持つてることもある。普通の名前が黄色いのがそう。ちなみにあのキャラは初心者にアドバイスをくれる』

なるほど。まずはキースに助言を受けるのがいいってことか。

他の初心者プレイヤーが集まっているのか、キースはサインを求められるアイドルみたく囲まれている。こうも人がいて話しかけられるのか？

そう考えながら、無精髭のオッサンに近寄り話しかける。

『よう、おのぼりさんって面してやがるな。オレでよければ何でも聞いてくれ』

声があったなら気のいいオジサンといった感じの台詞だが、通常の会話と同様に頭上にフキダシが出ただけだ。



そして選択肢出る。

ゲームの目的から操作方法まで。どれも説明書を読んでいけば分かっている内容だったが、とりあえず全ての選択肢を選んでから『もういいです』と話を終える。

『そうか。まずはジョブを決めるのを勧めるぞ。このセントラルにも幾つかジョブギルドはあるからな。行ってみるといい。良いCR OSS・FANTASIAライフを送れよ』

キースから離れ、カナメは再び噴水前へと戻り、

『ジョブギルドってどこにあるんだ？』

打ち終わって画面に目を向けると、ネピアは呑気に欠伸をしていた。これはしばらく操作してないとする行動だったか。

伊織からの反応が遅い。これまで俺のタイピング速度をあざ笑うかのように、すぐさま言葉が返ってきたが。

トイレでも行っているのだろうと考え、待つことにした。

三分経過。待ちくたびれたのかカナメとネピアは向かい合って身体をほぐしている。

俺は欠伸をしながら、時計に目をやると十時半を回っていた。まだまだ夜は長いぜと目をギラつかせる人もいるかもしれないが、俺の瞼はさつきから重みを増してきている。

俺の朝は洗濯と弁当作りから始まるし、朝練に出かけるひよりの朝飯の用意もあるして五時半時起きた。この時間になると眠気が襲い、必然的に規則正しい生活となってしまうている。

今日はまだ付き合うつもりだが、明日に差し支える時間になるまでにはやめることを告げようかと思っていると、返答があった。

『眠いから今日はやめる。ごめん』

まさか伊織から先に言われるとは予想外だった。少し悔しい。

『そうか。おやすみ』

『昨日から寝てなかったから』

聞いてもないのに理由を話してきた。

『寝ろよ』

『一日くらい寝なくても平気。昨夜はPT抜けるタイミングがなかった。かなめもいずれ分かる』

睡眠を後回しにするくらいに没頭する理由を分かりたくはないが、睡眠は大事なんだぞ徹夜は肌に悪いし。伊織が気にする性格とは思えないが。

『なら、俺もやめようと思うが、どうしたらいいんだ？』

『何が？メニューからログアウトを選ぶだけ』

『いや、セーブとか必要なんじゃない？』

『セーブは必要ない。今やめたら次プレイする時はここから始まる。もしセーブできるなら失敗してもやり直せるし様々な矛盾が生じるから。MMOの常識』

だから、そんな常識は知らんがな。

『わかった。というか、明日学校くるんだろ？』

寝過ごして昼前だったりしたら普通にサボってゲームとか、伊織ならありえそつだ。

『多分行く』

多分か。

『明日ジョブについて教える。無知のかなめのことだし、適当に育ててPTで役立たずと罵詈雑言浴びそうだから』

既に浴びせられてると言いたくもあつたが、

『じゃ明日頼む。おやすみ』

『おやすみ』

そう言いネピアの姿が光に包まれて消失した。

俺もログアウトしてノーパソの電源を落とす、大きな欠伸をひとつしてベッドに潜り込んだ。

## 第七話『ジヨブ、選びますか』

周囲から集まる視線が少し気にかかる。

俺はサツと、ランナーの様子を窺う投手のように顔を向けると、視線を逸らされ何事もなかったかのように会話に戻り、箸を動かす。これは俺への淡い恋心を抱いている奥手な同級生からではないことは明白だ。男女問わずに向けられていた視線には、羨望や嫉妬は含まれてはおらず、珍しい光景を見るような、訝るような、そんな視線だった。

「意外とまとも」

弁当を開けて中身を一目見ての感想をボソリと言う伊織も気に掛かるのか、表情は変わらないが尻を僅かに浮かせ、心持ち窓の方に身体を向ける。ここ数日で分かったことだが、伊織は人付き合いを嫌うというより苦手なのだと感じた。だから意図的に避けてるのだと思う。

今日にしたってそうだ。

挨拶をしても『学校じゃ他人よ私たち』とでも言うように盛大に無視を決め込まれたし。だが、俺としてはそんな関係は嫌だし、迷惑がられるのを覚悟で昼休みに伊織に話しかけた。二つの弁当を持つて。

「もう少し気の利いたこと言えないのか」

「勝手に持ってきたのに、その要求は図々しい」

憎らしいことを呟きながらも、おろしたての箸を持つ伊織を見て、心底嫌がられてる訳じゃないと安堵する。

俺は机の広い辺を伊織の机の横にくつつけてから座り、自分の弁当箱を開ける。右半分に唐揚げに野菜炒めに卵焼き。残り半分はふりかけご飯が詰まっている。

伊織の弁当もこれと全く同じだ。

いつもより一人分多く作るだけだから大した手間ではないし、こ

れで伊織との距離が縮まるなら安いものだ。ちなみに冷凍食品はな  
るだけ使わないのが俺のこだわりだ。

一口サイズの唐揚げを口に入れる伊織を見て、つい顔が綻ぶ。伊  
織がグルメレポーターのように美味さを表情に出しているからでは  
ない。伊織は無表情で黙々と租借している。

けど、辛らつな言葉がないってことは文句はないってことだし、  
あとこうして机を合わせて弁当を食べるというシチュエーションも  
嬉しかったりする。坂本はいつも購買のパンだったし。それに異性  
というだけで希少性が段違いに変わる。

伊織も普段はそちらの組だ。昼休みになると何も持たずにフラリ  
と教室から出て行き、チャイムが鳴るギリギリにフラリと席に戻っ  
てくる。学食か購買かは定かではないが。

伊織に弁当を差し入れた理由はそのことを知っていたのと、あと  
一つ。

「なあ、伊織」

俺は声を潜めて言う。

「……なに？」

卵焼きを箸で切っていた伊織は顔を上げ黒い瞳を向ける。

「昨日の話だが、今は駄目か？」

「昨日の？」

「ジョブのこと教えるとか」

理由とはこのことだ。教えてくれる礼も兼ねての弁当でもある。

昼休みにでも食べながらゆっくり聞こうかと。

だが、ここでもいい話題か判断に迷った。教室内というオー  
プンな空間でオンラインゲームの話をしてもいいのか。

クラスメイトに伊織がゲーム、それもオンラインゲームをする人  
という認識はあまりないだろうし。伊織も思われないようにしてい  
たかもしれない。

まあ、クラス内の伊織の印象はミステリアスがよく分からないが  
殆どだろうし、伊織が外部の印象に気を配ってるとも思えないが、

万が一ということもあるから声を抑えて聞いた。

「別にいいけど。……説明が面倒くさくなりそう、かなめだし」

「細かい説明は必要ない。朝にネットで予め調べてきたからな」

「そう」

伊織は卵焼きを口に運びながら言った。

「ジョブっていうのは、クリスタルのかけらを手に入れることで選  
択できる数が増えていって、経験値とは別にジョブポイントにより  
成長し、アビリティを覚えることができ、他のジョブの時も使う  
ことができるんだろ？ あと、すっぴんともものまねしはマスターし  
たジョブの特性を得ることができるとか」

俺は得意げに説明した。いつまでも無知の冠は付けられてはたま  
らないからな。

「……………」

あれ、どうして黙っているんだ伊織は。さげすむ言葉もないくら  
いに完璧だったと受け取っていいのか？

「なんだ？ FFの話か？」

背後から声が掛けられ振り向くと、購買のパンをボールのように  
弄びながら立っている男子がいた。

「坂本か。FFって何のことだ？」

「オレも混ぜていいか？」

俺の疑問を流し、坂本は机を指さしながら聞く。坂本とは同じク  
ラスだが、俺と伊織がいつしょに弁当食ってるという光景にちっと  
も不思議そうな顔はしていない。

「俺は構わないが」

と、伊織に伺うように視線を向ける。拒否したら坂本には悪いが  
お引き取り願おう。

「別にいいけど」

伊織はアツサリと坂本の同席を認め、

「サンキュ。早崎さん」

爽やかに笑いながら坂本は今は不在の前席の椅子を寄せて座り、

パンの封を開けてかぶりつく。

「やっぱり購買の焼きそばパンは美味しいな」

坂本は簡潔に味の感想を述べる。焼きそばパンは購買部で世代を越え人気を不動のものにしている伝統の一品。取り合いにより昼休みは戦場になると聞くが、坂本の昼食は毎日焼きそばパンである。歴戦の勇士かこいつは。

「かなめ、誰こいつ？」

その様子を黙って見ていた伊織は俺に視線を向け聞いてくる。本当にクラスメイトの顔と名前覚えてないんだな。

「坂本藤二郎」

俺がそれだけ伝えると、

「要の無二の親友」

坂本は俺を指してそう付け加えた。真面目な顔で言わんでくれ。むず痒い。

「そう」

「よく隣で要と話してるんだけどな、本当に知らない？」

伊織は小さく首を振る。

「全然」

苦笑を俺に向ける坂本に俺も苦笑で返し、

「俺も目しか覚えられてなかった」

「そか。で、何の話してたんだ？」

全く気にしてない様子で、坂本は椅子の背もたれに肘を乗せながら話題に乗っかろうと聞いてきた。多趣味である坂本はどんな話題でも相応の知識を持って参加できるからそれなりに人気がある。ま、顔もそれなりなものもあるか。それなりに。

「伊織にジョブについて教わろうとしていたとこだ」

「さつきも少し聞いたが。要、ゲームでも始めたのか？ しかもレトロゲーを」

意外そうに言う坂本。というか、

「レトロゲー？」

「さっきのつてFF5だろ？　かなり古い作品だぞ。リメイクはされてはいるが」

「えふえふ？」

坂本の言ってることがよく分からない。最近もこんなことがあったよな。

「違うのか？　どうみてもFF5かと思ったが」

「それ、かなめの勘違い」

黙ってやり取りを聞いていた伊織が口を挟む。確かに坂本は勘違いをしているみたいだし、ビシツと言ってやってくれ。

「多分“ジョブ 説明”とでも検索して、出てきたFF5のページをCFのページだと勘違いして覚えたと思う。馬鹿のかなめのやりそうなことだ」

なんで俺の行動を知っているんだ伊織は。

「……勘違いしてたのもしかして俺ってことか？」

「そう」

伊織はあっさりと頷く。

「……そうか」

誰か教室内に時間を戻せる人はいらっしやいませんか？　得意げに言った自分がもの凄く恥ずかしく思えてきたんでなかったことにしたいんですが。

「どんまい」

と、坂本は俺の肩に手を置く。その表情は悪戯っぽく笑っている。誰か穴を掘ってくれないか？

「あながち間違ってもないけど。ジョブはキャラのレベルとは別にレベルがあるし、覚えたスキルは他ジョブでも使ったりできるから……怪我の功名？」

使い方に不安があるのか小首を傾げて言う伊織。調べたことが全く無駄だったってわけじゃないみたいだし、そうかもしれない。

「FFじゃないみたいだが、何のゲームの話なんだ？」

「CROSS・FANTASIAっていうゲームだが。知ってるか」

？」

「最近話題のMMORPGのことか？ 評価は高いみたいだな。オシはやってないが」

「知ってるのか」

タイトルはともかくMMORPGって言葉がすらりと出ることが意外だ。そこまで浸透していたとは。

「意外そうな顔だが、要がMMOの話をしているってことの方がもっと意外だぞ。どういう風の吹き回しだ」

ひよりと同じような反応だな。そのうち俺がオンラインゲームをしてると知ったら天気の心配をする奴も出てきそうだ。

俺は唐揚げを一つ減らし、

「まあ、色々あったんだよ」

坂本にはそれだけで十分だろう。

「そっか」

坂本は予想通り深くは突っ込まずにさっぱりとした反応をする。このしつこくない性格が俺は好きだ。俺の致し方なくやってた主婦業に対しても、褒めもバカにしたりもせずこんな風だった時は嬉しかった。

「じゃ、話の続きをどうぞ」

手のひらで紳士的に差しだし坂本は促した。えっと、どこまで話が進んでいたっけか。

「ジョブっていうのはそのFF5ってのと似ているってことでいいのか？」

「ま、大体は。けど、ジョブレベルは最大99あるし、スキルの数も違う。世界観的なことについては説明書に書いてあると思うし、省く」

焼きそばパンを食べながら坂本はふむふむと相槌を打っている。

「じゃあ、何を教わればいいんだ？」

弁当を半分くらい減らしている伊織は、

「MMOは育成が大事。それには装備にボーナスステータスの振り



方とか色々があるけど、ジヨブが一番重要」

「キャラのレベルは？」

坂本が聞く。お前は未プレイなんじゃなかったのか。

「それは普通にプレイしてれば上がるから。生産専門プレイなら別だけ」

「生産プレイもできたんだ」

「そんなにはいないけど、プレイスタイルの一種としてはゲーム的にも確立してる」

二人の会話に俺の理解が追い付かない。

「あ……育成はどのくらい大事なんだ？」

このままだと会話と話題から俺がフェードアウトしていくのを危惧し、俺は怖ず怖ずと割り込んだ。

「プレイスタイルは人それぞれではある。基本的に。けど、PT組んだり効率を考えたら、育成はしつかりとしないと駄目」

「PTってプレイヤーといっしょに戦うことだろ？ 具体的に何が駄目なんだ？」

「野良PT……知らない人達と即興で組む場合は効率を求めることも多いから、キャラのレベルに見合わない強さだと批判を浴びたりする。『使えない』『真面目にやれ』『蹴るから』とか罵詈雑言の嵐」

淡々と伊織は言う。

新人イビりを思わせる言葉だが、ゲームで本当にそう言われることなんてあるのか？

「そういう人がいるっていうのは聞いたりするが、そこまで酷い方が少ないとも思うけどな。未プレイヤーの想像でしかないけど」

「レベル50までの狩場なら少ない方みたい。それ以降の狩場は効率厨が増えてくると掲示板を見た。私は基本ソロだったから見たことない」

「だったらそこまで気にする必要もないんじゃないのか？」

「かなめが役に立たなかつたら私が言う」

「おい……」

身内に罵倒する奴がいたよ。既に頻繁に浴びてるが。

「半分は冗談。だけどジョブ毎の特徴と育成方針は知っていたほうがいいと思う。実際にそうするかはかなめが決めればいい」

「半分かよ」

結局は役に立たなかったら罵倒されるんじゃないか。

「普通のオフラインのRPGでも攻略にあたっての効率的なキャラ育成は大事だな。楽に進めるためには」

「一般的なRPGなら初めから育て直す手間はあまりないけど、オンラインは時間が掛かるからよく考えた方がいいことは確か」

坂本と伊織のアドバイスを有り難く受け取ると、やはり育成はちゃんとした方がいいのだと思わせる。罵詈雑言を浴びたくもないしな。

「まあ、せつかくやるんなら強くはなりたいし、教えてくれると助かる」

「要、昼休みあと僅かだぞ」

伊織を見据えて俺は言う、坂本からそう告げられる。時計を見るとチャイムまであと三分に迫っていた。

「うお、やばい」

慌ててまだ半分は残る弁当を食う作業に集中する。伊織は今し方食べ終えて手を合わせていた。意外と礼儀正しいな。

「かなめ、続きはどうするの？」

かき込んだご飯を租借しつつ、俺は脳内の予定表を開く。授業を終えた後は帰宅して洗濯もの取り込むくらいだし。

「帰りにどこか喫茶店辺りとか」

「かなめの奢り？」

「まあ、飲み物くらいなら」

「じゃあ、それで。坂本は？」

俺は目を見開いて驚いた。伊織から誘うようなことを聞くとは…

…ゲームをする者同士だから波長でもあったのか。

「是非聞いてみたかったが、用事があつてな。すまん」

坂本は片手を胸の前に挙げて申し訳なさに断った。

「そう」

伊織は残念そうな様子もなく、俺の前に弁当の空箱を寄せて、

「五十五点」

俺の自信からしたら辛口な評価を告げた。

「酷い点だな」

俺は苦笑する。

「……………」

伊織は何も答えず頬杖を突いて窓へと顔を向けた。

俺は小さく息を吐いて、弁当を食う速度を速めて、また持つてきてみようかと考える。今度は更に良い点を言わせようと心に決めて。

## 第八話『ジヨブ、決まりました』

下校時刻となり、俺と伊織は並んで校門から出た。

これから喫茶店で語らうといえば、端からみたら中々の青春成分を感じさせる一ページだが、会話の内容はゲームである。それも生徒と先生のような立場だ。

優しく教えてくれることはなく、少しでも理解が乏しかったら容赦のない罵倒が飛ぶという厳しい指導だ。

でも、嫌ではない。いや、そういう趣向があるという意味ではなく、同じ趣味で話せる人はいなかったからな。共通の話題で盛り上げられるのは嬉しいものだ。

無言で隣を歩く伊織と共に向かう喫茶店は帰路の途中にある。帰り道はいつしよの方向なわけだし、帰宅時間も考えたとその方がいいだろう。そう言っていると伊織も頷いた。

喫茶店に入り、席へと着く。

丁寧に拭かれ窓ガラスから差し込む光を反射する白いテーブルを挟んで座る。

伊織は鞆を隣に置くと、物珍しそうに置かれた角砂糖などを眺めた後、メニューを手に取って眺める。

「意外と豊富」

伊織は淡々と言う。コーヒーのことだろうか。軽食を含めてもこの店のメニューは多い。それに味もいい。坂本やひよりと何度か訪れたことがあるが、いい店だと思う。雰囲気も落ち着いているし。BGMのクラシックも邪魔にならず耳心地よい。

「伊織は来たことないのか？」

訊ねると、伊織はメニュー置いて、

「喫茶店に入ったのは初めて」

真顔で言う。それはあってもおかしくはないか。俺も誰かといっ

しよじゃないと入ろうとは思わないし。

「そうか」

「……憐れんでる？」

瞳を細めてジッと睨むように見てくる。

「いや。俺だつて数えるくらいしか入ったことないし」

「そう」

素っ気なく言つて伊織はメニューに視線を落として黙る。

「ご注文はお決まりですか？」

若い女性店員が注文を取りに来て、俺は無難にコーヒーと答えた。そしてメニューから顔を上げた伊織は、

「スーパーウルトラハイパーミラクルストロングエベレストデラックスパフェとコーヒー」

長々とした名称をスラスラと言うと、店員は一礼して席を離れる。俺は噛まずに早口言葉のように言ったことに感嘆し、

「奢るのは飲み物だけだぞ」

今月は出費が激しかったし、メニュー中最大の値段とボリュームを誇るパフェを奢れる余裕はない。

「分かつてる、自分で払う。で、ジョブについてだけ」

唐突に本題に入ってきたな。

「説明書を読んだならジョブの種類は把握していると思うけど、かなめは何になりたいの？ 直感でいい」

「ジョブだろ？ だったらボクサーだな」

俺はシュツと固めた拳を構えて軽く突き出すジェスチャーをする。

右ジャブ、左ジャブ、右ストレート。

右ジャブ、左ジャブ、右ストレート。

仮想の相手が繰り出すパンチを避ける動作も折り込みながら、座りシャドウボクシングを続ける。

ジャブ、ジャブ、ジョブ……うん、伊織の目が冷たい。ツツコミはなしですか。

ついでに周囲からの視線を浴びているのがヒシヒシと伝わり、顔

が茹だつたタコのように真っ赤になつてるのが自分で分かる。鏡は見たくない。

「……えっと、ジヨブは確か十個くらいあつたな……」

説明書には二ページを使いジヨブの一覧に簡潔な説明文が添えてあつた。

「正確には十五。かなめは数も数えられないのか？」

「コーヒー代出すのやめるぞ」

「うる覚えは誰にでもあると思う。落ち込むな、かなめ」

分かり易い変わり身だな。落ち込んでたわけじゃないが。俺の心を針でつつくよりコーヒー代の方が重要らしい。

と、ここで注文した品が運ばれてきた。

まず芳香と湯気が立ち上るコーヒーが俺と伊織の前に置かれ、そして一旦奥へと戻って再び出てきた店員は、両手で優勝カップのよくな大きさの容器を持って慎重に残りの一品と銀のスプーンを置き、「ごゆっくりどうぞ」とマニュアル的な一言を凜とした声で言い去つていく。

「……………」

これが目の前にそびえるスイートタワーの感想である。

伊織の姿を覆い隠すほどの高さを誇るパフェが産み出された過程は定かじゃないが、盛られたクリームから顔を出す数多のフルーツのように付けられた修飾語から察するに、その場のノリだったのではなかるうかという安易な想像が浮かぶ。

そもそも名称からして意味被つてるし。「ウルトラでよくな？」

「お、それいいな！ じゃ、スーパーも付けるか」そんなやり取りがあつたのではなかるうか。

カタツとパフェの向こう側で音がした。

伊織がスプーンを手に取り、パフェを胃に収める作業に取りかかつたのだらう。

ウルトラ 中略 パフェはまるでメルヘンの世界ならばお菓子の国に存在する山だ。その高さは標高一メートルはあるだらうか。

向かいの伊織の姿を隠してしまっている。溶けないように敷き詰められた砕いたドライアイスが発する冷気がこちらまで届く。

それにしても美味しそうだ。フルーツや菓子はともかくソフトクリームの一舐めくらいは許してくれるだろう。と、訊ねずにパフェへと指先を伸ばそうとすると、カップの脇から出てきた手でパシリと弾かれた。

「私の。かなめは意地汚いな」

向こう側から冷めた声が聞こえた。というか何故見えたんだ。

「いや、少し味見を……つか、そんなに食べれんのか？」

全部食つたらお腹を冷やすどころでないと思うぞ。

「食べれる。かなめはさっきの話の続きを考えてればいい」

伊織はそう断言した。とても華奢な体に収まりきる量じゃないが、ミルクの海が残る未来しか想像しえないのだが、パフェ代は伊織が払うんだしとやかかく言うことじゃないだろう。

「……さっきの話か……」

俺は腕を組んで先程の話の流れを思い出そうとする。パフェのインパクトで吹き飛んでしまった。

ああ、ジョブか。ジョブを何にしたいか聞かれたんだった。

昨夜、ゲームを終えた後寝る前に説明書を開いて、ジョブの項を読み直していた。その中に惹かれるのが一つ。

「パラディンになりたいとは思ってたが」

闇を切り裂く聖なる騎士　そんな説明文に書かれていた。実にパラディンらしい響きが俺の心の琴線に触れた。ゲームの世界でなら俺も騎士になれるのだと。

「かなめ。それ、上級ジョブだから今はなれない」

「上級ジョブ？」

「そう。基本ジョブは主要都市で無条件で変更できるけど、上級ジョブは特定のクエストクリアしないと解放されない。パラディンだと『神殿騎士認定試験』がそう」

クエストというのがまだ理解できてないが、つまり今は無理って

ことか。

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

伊織は山を順調に崩し、ようやく伊織の頭が山の向こうに見えた。なんたるハイペースな食いつぶりだ。大食いには華奢な人も多いが伊織がそれなのか。というか冷たいものを食べてるのに頭痛はしないのだろうか。

しばし、パフェを減らすさまを見続けると、ふいに伊織は顔を上げる。

「……ジョブレベルが成長しない『旅人』のまま進める手もあるけど、それだとクエストのクリアは難しくなる」

「だったら、それまで他のジョブになつてたほうが得じゃないか？」

「一概にそうともいえない。ジョブレベルの合計が高くなるほど上がりにくくなるから。元々上がりにくい上級ジョブはそれが顕著」

「だから、伊織はサブキャラを作ったのか」

「かなめにしては理解が早い」

そう言つて伊織は僅かに口元を綻ばせる。評価がマイナス10からプラス10になつたくらいの言葉ではあるが、ここは素直に喜んでごっつ。

「時間を掛ければ一キャラで全ジョブレベルマックスも可能だけど、それだと不眠不休で数年掛かるとされているし、能力値もどっちつかずで結局は弱くなる。物理系なら物理系で育てて、魔法系なら魔法系で別キャラで育てた方が早いし強くなるし」

「不眠不休は無理があるだろ……」

「いるらしいけど。常時ログインしてかつ寝落ちしないキャラ」

「……マジか」

寝ずにプレイし続けるなんて不可能だろ。その疑問に答えるように伊織は言つ。

「噂では仲間内で交代でプレイしてるとか、バイトでも雇つてやらせているとか言われている。あと、中の人が存在しない説もある、まあ、これは一種のオカルトめいた類の話だけだ」



「そこまでするか普通？」

「ネトゲならあってもおかしくない話」

「どんな世界だよネトゲって。」

「将来的にパラディンに就くつもりなら、今は戦士か司祭を選べば無駄がないと思う」

「戦士か司祭だな」

言いながらも伊織は順調に減らしていつている。おっと、溶けてきたアイスに刺さったウエハースが傾いて今にもこちら側に落ちそうだ。取って代わりに食べてやるか。と手を伸ばすと伊織にスプーンで叩かれた。地味に痛い。

「私の。……だけど、そのくらいならいい」

伊織は食事を邪魔された犬のように鋭い視線を向けたが、少し考えるように目を伏せてからそう言った。俺が叩かれた意味は？

「あ、じゃ遠慮なく」

ウエハースを抜き取ってついでにクリームをたっぷりと付けて一口。サクサクとした食感にほろりと口の中で広がる甘み。まさしくウルトラ 中略 パフェという名に相応しい。

「どっちにするの？」

「何がだ？」

「戦士か司祭」

「今決めると言われてもな。よく分かんないんだが」

「……仕方ないな。一度しか言わないからよく聞いといて」

伊織の声がよく聞こえるように俺は少し体を前に倒す。メモの用意は必要ないだろうか。

「パラディン解放クエストの適正レベルが15だからそれを基準にしての話だけど、戦士からパラディンになるなら、クラスチェンジは剣士にすべき。そこまでに覚えるスキルで【両手持ち】と【挑発】があるから、ソロでも火力は申し分なくて、パーティだとタゲ取りもできるパラディンになれる。パラディンは剣士より防御高いし、スキル【聖なる加護】もあるから、タゲ取りに最適だと思う。一応

パラディンだけでも【かばう】あるからタゲ取り代わりにはなるけど、【挑発】の方が便利。成長補正もパラディン向き」

饒舌に伊織は戦士経由でのパラディンのメリットを説明してくれた。……ことだけは分かった。

「……………」

メモかICレコーダー用意しとくべきだったか。そうすれば帰宅して意味の分からない単語をゆっくりと調べられたし。

聞き馴染みのない言葉を一度聞いたくらいじゃ、歩いてる最中にぼろりと抜け落ちてしまいそうだ。

そんな俺の整理できてない頭を知ってか知らずか伊織は続ける。

「次に司祭からパラディンにするパターンだけど、一般的に司祭は後衛キャラのイメージで物理攻撃は苦手な印象があるけどCROSS・FANTASIAの司祭は、物理系もこなせる。むしろアンデッド相手の火力なら戦士以上。成長補正は物理向きじゃないけど、MPと精神はパラディンにも必要な数値だし問題ないと思う。スキルは対アンデッドを覚えるし、パラディンは対悪魔スキルがあるからその二種族相手ならかなり楽になる。回復魔法もあるからソロでも困らない」

一度も噛むことなく言い切って、伊織はコーヒーを飲む。

「……………」

どうしよう。英語教師のネイティブな発音より意味が分からないホワイ？ と言ってお手上げのジェスチャーをしたい気分だ。

「そんな感じ。どうするか決まった？」

小首を傾げられても、俺には今の説明を頭に留めることがやっとだ。それを踏まえての適切な選択は出来そうにない。

「伊織からしたらどっちがお勧めなんだ？」

「え……………」

虚を突かれたように伊織はスプーンを口にくわえたままこちらを見る。

「……私はできたら戦士からがいい。……私は魔法系にするし、盾役がいたほうが……その…便利だし」

「じゃあ、そうするか」

「かなめは主体性がないのか？」

「これに関しては経験者の意見を参考にしたほうがいいと思っただけだ」

「そう」

伊織は三分の一となったパフェの完食へスパートを掛ける。

その様子を黙って眺めててもよかったが、俺は鞆から適当なノートを取り出して忘れないうちに伊織のジョブ講義の要点を書くことにした。

喫茶店から出て携帯で時刻を確認すると四時を回っていた。

伊織は、ウルトラハイパーベリーナイスグッドミラクルハッピーデラックスパフェ（うる覚え）を完食し。満足げな表情だった。

あの量が隣を歩く伊織のか細い体のどこに入るのか謎である。甘いものが入る別腹というのはブラックホールにでも繋がっているのだろうか。聞いてみても小馬鹿にされるのが目に浮かぶから訊ねはしないが。

帰ったら洗濯物を取り込んで　と帰宅後の行動を確認していると、

「今日はいつ来る？」

伊織が黒い瞳を向けて聞いてきた。

「掃除でもしてほしいのか？」

あれからすぐ汚くなるなんてことはないと思うが。

伊織はため息を吐き、

「素なのか分りにくい」

「CROSS・FANTASIAの方だろ。今日は八時にはいけると思っ」

そういや百均の品で整理整頓してやるうとも考えてたな。近いうちまた行くか。

「そう。わかった」

それで会話はなくなり、先にある伊織のアパート前で分かれて俺は帰宅した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2812x/>

---

ネットゲーム、始めました

2011年11月7日08時09分発行